



第十八卷 第一號

(通卷第六十九號)

昭和八年一月發行

研究

青年結社殊にシヨン會起原の説 (上)

長 壽 吉

この題目に關する研究は、當該の結社或は團體の出版に係る小冊子、或は逐次又は隨時の雜誌等が、或は二三回或は數回にして廢刊となるもの、禁止さるゝもの等があり、又印刷に附せずして謄寫したるもの等もある爲に、之を見る事頗る稀なる爲に甚困難を感ずる場合が多い。例せばシヨン會創立の頃の雜誌「神と祖國」の如きは、唯一回のみ刊行されたもので、今日に於ては之を探し求むる事さへ不可能かと思はれる。私は僅少な材料に由りて、諸著書を參照しつつ、茲にその概説的なる説述を試み

る事とした。

第十九世紀が所謂「多趣多様」の世紀である事は、エルンスト・ベルグマンが小著「十九世紀の精神」の中に述べて居るが、この事は既にゲルフィヌスが「十九世紀史序論」にて説いて居る處で、殊にランケは一八三二年「歴史政治時論」發刊の序文に於て、一八一五年或は一七八九年以後の形勢を叙述して、歴史現象の「多趣多様」と「尖銳性」と、且その「深き根源」を稱して居る（註こ）。而してこの多趣多様は全幅的に多趣多様であるのみならず、歴史現象の各々の内容に於ても考へらるゝ處である。今日の吾々との密接なる關係の存在はこゝに生じ、且十九世紀史の研究の興味と必要とが爰にあると謂ひうる。この三者を有するものの一として青年結社が考へられる。この「結社」と云ふ語は或は妥當を缺くかとも思はれるが、他に「協會」「團體」又は「運動」などの語も考へられる。然し獨語の *Bewegung* と佛語の *mouvement* とは少しく意を異にし、且佛語の *cecle* も考慮するを要するから、運動その他語よりは結社を選擇む事とした。殊に一般に云はるゝ運動と云ふ語は敢てこれをさけた。

十九世紀初以來の青年結社の重なるものを見るに、革命當時恐怖政治に反動を興へんとした一七九四年巴里のジュネス・ドレエを初め、一八一七年獨逸のブルシエンシャフト、一八三一年の青年イタリヤ黨、一八四〇年の青年アイルランド黨、一八四二年の青年イングランド黨、一八四四年の YMC A。以上を十九世紀前半のものとし、其後著明なものには、一八九四年のシヨン會、一八九五年の青

年トルコ黨、一九一三年の自由獨逸青年團、一九二〇年の青年社會主義者團等々、これらを十九世紀後半のものと觀られる。然るにこれはその大略に於て、前半のものは政治運動的傾向を有するに比して、後半のものは社會運動的傾向が多いと思はれるのは、時勢の傾向の環境の結果とも考へられると同時に、一面に於て青年結社それ自體の、內的な發展の傾向にも由るものである。則ち直ちに政治的運動に表はるゝにあらずして、複雑なる社會的運動を通じて政治的運動に發露せんとする傾向が多い。この事も亦この題目の研究の重要と、困難とを示すものと解せられる。

さて青年結社の思想の上に、吾等の見るべき特徴は以下説述の間々に明らかにし度く思ふが、私は先づ以て次の二傾向を明にして置く。(其一)は、彼等が一社會層を構成すとの強き信念を有する事で、詳説せば、彼等は青年にして將來の社會人なりとは考へながら、自らも一社會なりとする事。明日の社會は吾等のものであるが、今日の吾等も一社會なりとする事である。決して未完成の一物にはあらず、特異の一社會なりとする事である。將來社會の改善進歩を提唱して其のための教養準備を力説する處の、所謂將來觀念に在りながら、自らも又一現在社會なりとする事は、青年結社の思想内容の矛盾、——と謂ひ得ざるものとするも、誠に特異な現象である。一九二五年復活祭のイエナに於ける青年社會主義者團の第三回協議席上のマクス・アドリアの演説に之を見る可く(註二)、既にワルトブルグフェストの席上の諸言明にも見る可く(註三)、A C J F (アソシアン・カトリック・ドラ・ジュネス。

フランセイス)の宣言にも之を見る可し(註四)。而して將來觀念に關しては一九二〇年自由獨逸青年團のワイマール會合(則ちワイマール精神と稱するものの生じたる)に於ては、「階級鬭争のみが社會革新の方法では無い事を將來に期し自發教養に由て次の人生涯を完成せよ云々」とあり(註五)、マルク・サングニエのシヨン主義が、過古一掃と「來らむとする世紀」を唱へた事にも觀られる(註六)。

(其二)は、セセツシヨニズムと稱す可き傾向で、遠心的分離運動に屬するもの思想が、強く包含されて居る事である。既に青年結社が自らを以て一社會層を認むることは、同時にそれが還境との分離に由るの意で、このセセツシヨニズムは總ての青年結社に、見らるゝ處であると謂つて差支なく思はれる。一九二五年のS.A.J.(Socialistische Arbeiterjugend)のイエナ決議中に、「今日の政治及び社會組織に對して吾等は何等の責務をも有せず」と云ふのは、この思想の傾向の一端であり(註七)、既にワルトブルグ祝典の際に於ける、イエナのレネデイガアの演説にも察せらるゝところであり、一八九九年シヨン會はその創始の因縁に稍々反するものと思はれる宣言に、教會との無關係を以てせる事もあつた。一八九七年リヨンの「自由佛蘭西」を機關紙とする一青年團體が、シヨン會との關係に於て「豊かなる收穫の畦」に對し、同年フリブウル舊教學者等の「吾等は法王と共に在り」とせる語に反し、マルセイユ歌の終句を唱へた事(Qu'un sang impur abreuvé nos sillons)の一挿話も、かの傾向を窺はしむるものである(註八)。

青年結社の多く生じた事及びその特殊の内容が、十九世紀の特異な史實である事は、多くの人の考ふる處であるが、佛蘭西に於てはその端緒が一七九四年の華公結社に在りと謂ひ、獨逸に在りては一八一七年のブルシエンシャフトを、ウアブルシエンシャフトとして考へて居る。然しこの事は即ち、偶々佛獨青年結社の各々特獨の姿を見るもので、同時に以後のものがこの二傾向を混じて、これを浪漫主義的な状態に於て、包括して居る事を考へさせるものである。今日の青年結社も各々この傳統の中に存在して居るものに外ならない。則ち獨佛各々その特色があり、且又一面に於て獨は佛の一面を併せ、佛は獨の一面を併せて居る。私の見る處に於ては佛蘭西の青年結社はむしろより理想的な傾向が多く、獨逸のはむしろより實際的な傾向が多い。

華公結社(ジュネストレ)は、啓蒙知識者の中流以上の青年の團體で、多數の猶太人知識者をも加へたものらしく、流麗の風俗所謂ミユスカダン、或はアンクロワヤブルを装ひ、棒を以て護身の具としたが、主として過激派「吸血團」に對抗するに、溫和なる共和主義の理論を、當時の國民公會に普及することを以てした。彼等が愛國者を以て自ら稱したことは、ブルシエンシャフトと同様である。この事は、吾等の注意を要する處である。華公結社は要するに知識的運動の一であることに、その重要な點がある。

一七一七年ワルトブルグフェストのブルシエンシャフトは、イエナ大學その他學生を中心とし、知識階級のなところは前者に等しく思はれるが、必しもミュスカダンの流麗公子のみでなく、多くは生活の環境より出づる、理想を出でて實際に傾く風があつたものである。ワルトブルグ祝典の状況を詳にするに、反軍國主義の行動を起し、古制傳統を破壊し、實際運動に傾向した。殊にカアル・フォルレン指揮のギイセン黒黨の如き、直接改革手段を開始せんとするものがある。要するにその趣が頗る華公結社とは異つて居る(註九)。

十九世紀末の佛蘭西青年結社、その多くはセルクル・デチウドに屬するもの、シヨン會の如きもの。又獨逸のもの、自由獨逸青年團の如き、S A J 又はハノオフエル派、ホーフガイスマアル派の如き、各々華公結社とブルシエンシャフトとの傳統に在つて、一はより理想的であり、一はより實際的である。勿論獨逸にも純然たる舊教主義のブロックもあり、佛蘭西にもゲエド說傳承に由る、實際者なきにあらず。然し大略に於てこの二傾向を、各々の著明なるものに見る事が出来る。而して既に青年結社が、現前の政治的社會的或は道義的權威の否定に始まる分離に立ち、將來觀念に導かれて自ら一社會を成すとするものには、自然その指導觀念を有し、これもおのづから佛獨に於て異なるものがある。佛蘭西にありては大略舊教信仰に存し、獨逸にありては大略マルクスのテオリイに存する。この事も亦前述の場合と等しく例外なきにあらず、唯その大略に存する傾向に就いて謂はるゝ事である。

青年結社がこの指導觀念に準據するところ、又これに由りて更に二傾向を、把持することが浪漫主義的なりと云ふのは、かのブルシェンシャフトが世紀初の浪漫的思想を、夙にその言論と行動との上に流露しつゝあつたと稱せらるゝ事とは、全く別意のことである。世紀中葉以後に文藝上の浪漫的思想が在りしにせよ無かりしにせよ、政治的浪漫主義の如何を問はず、社會主義思想の一面に浪漫主義の在りしにせよ無かりしにせよ、之等とは全く別に青年の結社はそれが青年の結社にして、前記の諸傾向を有するがために、浪漫主義的などころに於て、吾々の關心がある。例へば大戰前の自由獨逸青年團が、唯物史觀に出發しつゝ、且つ社會改善の心理的探究に由る方途を唱へ、更に唯物史觀に立脚した社會觀に出でて居る。又ネオ尙古主義に培はれたシヨン會は過古を一掃し、一面舊教傳統の遵奉を唱へ、一面社會主義的民主主義を、むしろ唯物論に立脚し、更に世界平和の維持にこれを擴張せんとして居る(註十)。

### 三

私は極めて簡略に、ウアブルシェンシャフトを端緒として、最近獨逸青年結社の著明なるものを述べ、次にシヨン會起原の説を試みよう。一八一七年ワルトブルグフェストは、ライプチヒ戰後の國民的感情を積極とし、自由主義に關する國家の状態を消極とし、國家權威の道義的確立を否定して生じたものである。反動主義の書籍、軍裝、軍需品等を燒棄して、種々の演説ありたる中には、「期待した

りしものは皆他のものと代り、多くの偉大なる事に就いては、當に來る可き且來らねばならざりしものが、皆消滅せり」とあり。又「青年集團の國家を作れ、それは祖國未來の形なり」とあり。又「青年の清新なる意氣の如き精神が、全獨逸に湧かざる可からず、それは國家のために、自由と正義のためにである」とある(註十一)。彼等は現前の國家社會の無權威に不平にして、分離せんとし、宗教改革の精神たる良心の自由に従ひ、延いて壓力的なる思想を束縛とし、青年の意氣確實に祖國の運命を擔ふと信じ、故に何ものをか將來に創造せんことを欲して居る(註十二)。

一世紀はこの傳統を持続した。一九一三年ザクゼン國ホーエンマイセンに於ける、自由獨逸青年團集會は、産業社會的不平等に驚き、産業の發達と反比例に低下する社會道義に嘆じたる青年の集會で、其端緒と發展とは、ウアブルシエンシャフトと同様である。彼等の思想内容には矛盾が認められる。彼等は現前の社會の非なりとする事の上に、唯物史觀を以てすることの不當或は不充分なることを認め、何等かの心理的方法の探求を必要とするが、宗教に由る可きには彼等は餘りに近代科學的なる思索に専らである。然るに彼等は資本主義社會の破壊を、マルクス的方法解決に由る觀察立案に傾向して居た。この矛盾の内容あることは、青年結社の研究對象の興味である。而して自由獨逸青年團は一九一七年一九一九年の集會を行ふ間に、有産的部分と無産的部分との間隙を生じ、青年社會主義者團は元來の自由獨逸青年團より分裂して、之を壓倒するに至つた(註十三)。



一九二〇年ワイマールに於ける自由獨逸青年團の會合に於ては、「ワイマール精神」の下に、階級闘争のみが社會革新の方法でなく衷心將來社會の改造を圖るべきことが稱せられた(註十四)。翌一九二一年にはキイル及びビイレフェルドに於て、青年社會主義者團(この時既にこの稱あり)の集合があり、自由獨逸青年團の如きものならずして、直ちに勞働運動社會運動に出づることが推獎されて居たが、この傾向は翌年一九二二年のベルリン集會に於て益々明瞭となり、S A Jの名稱が決定された(註十五)。かくて文化運動的傾向は殆んど消滅して、實際運動の領域に入り、從て社會民主政黨との關係を密接にした。社會民主黨はS A Jの將來觀念に據りて、社會主義者の養成に對する希望を助成し、講演講習出版等に由りてその接近を圖つた。然るにルール占領事件の興奮が、これらの青年をして「祖國のため」の死を叫ばしむるに至つて、一九二三年十月のホーフガイスマール集會には、國家主義的傾向の社會主義整理が唱へられ、一九二四年八月のハノオフエル集會には、マルクスドグマに由る歐洲經濟聯邦の理想の國際主義的傾向が表明され、この兩派の分立は以後の形勢となつた。

一九二五年復活祭日の兩派イエナ集會に於ては、議論はおのづから社會民主主義と國家國民との關係の問題の上にあつたが、マクス・アドリアの説は有力に支配して、彼のマルクステオロイに由る、巧妙なる論理と學理的體系の整然たるものに動さるゝこと多く、ホーフガイスマール派の反對あるにも拘はらず、茲にイエナ決議は獨逸青年團の大勢を支配するものとなつた。曰く青年社會主義者團は政

治上の主義として、國家國民的 ロマンティックを排斥すと、又曰く、今日の民主主義は唯單に、選舉投票の用紙の上のみに存すと、又曰く、社會主義的無産階級青年は、今日の政治及社會組織に對し、何等の責務を有せず云々と(註十六)。一九二五年イエナ決議以後の形勢は、直接私の有する題目との關係が少い。以上獨逸青年結社の主なるものの發展を述べたのは、前述の如き青年結社の特異なる内容と、獨逸に於けるものの傾向に參照せんが爲めであり、且要するに、之を參照して、主としてシヨン會起原の全く別趣なることを知らむが爲めである。

## 四

シヨン會は等しく民主主義に由る、社會運動團體の一と考へられるが、その創始の由來と内容とに於て、甚しくその趣を異にして居る。元來セルクル・デチウドの一として生長し、政治的社會的意見の宣傳を本體として居る。シャルル・モウラスの如き王政復讐の一派、或はラクシヨン・フランセイズの周圍に在る一派、或はサンデイカリストは勿論、ガリカン派とも、又ウルトラモンタン派とも、ジェスイトとも關係が遠く。かのSAJと社會民主黨との關係の如きものは無い。猶又ルネ・ドラ・トゥル・デュ・バン一派、或はアルベエル・ドマン一派の舊教派にも關係が遠い。シヨン會がピウス十世の態度に機會して衰微に入り、その不明瞭なる思想内容に對して、多くの非難をうけたる最近の事情は、今これを見る要なし。吾等はその起原に關して、青年結社とその運動の上に參照すべき、史上の興味を見

るのである(註十七)。

一八九三年リヨンに於ける雜誌「自由佛蘭西」を中心とする青年團體と、シヨン會との關係は、おのづから前者が先蹤となつたことを意味する(註十八)。然しシヨンは當時の思想内容不明瞭なるA C J Fの中に包括され(註十九)、端緒を一八九四年のポウル・ルノオダンの雜誌「ル・シヨン」に合流せる、レ・コンフェランス・ドラ・クリプタに有し、且最古き青年結社と思はるゝセルクル・デュ・リュクサンブウルの助成に依るものである。「ル・シヨン」は法王レオ十三世の教示を遵奉して、「神の睦を開く」(Crousor le Sillon de Dieu)の意に出で、豊なる收穫を期して精進せる、若き人々の志を表す。シヨン會の出生は巴里スタニスラス高等學校に在りて、マルク・サングニエとエチエン・イサベルとの意に出で、先づコンフェランスに始まる。その思想はスタニスラス校長オウギュスト・ジヨゼ・アルフォンス・グラトリイの説に承けて居た。グラトリイは一八五二年にはソルボンヌ倫理學を擔當し、一八七一年にはヴァチカン會議事項に反對し、不可謬論を非難した。彼はその社會革新の説を「社會再生新の根原論」に明にし、學生に對し道義的自覺の論を説き、「汝等は世間の救ひ改むる神聖なる義務を有せり、世間百般の事物の再生新に責務あり」と教へて居た(註二十)。

マルク・サングニエは志願兵としてトゥルの聯隊に在り、この間彼は、具體的には軍隊は形式の訓練に専らにして、何等將來の市民たる青年の教育に貢獻するところ無けれども、抽象的には軍隊組織に

於ける中心たる權威の存在の觀念を得た。彼は社會再生新に對する權威を求めた。「吾等は最も強き力が、吾等の上に存することを知つた。クリストは吾等が直接に、吾等の心を以て親しく語るところのものである。」「クリストとは、全般の福利の、最高にして同時に最大なる表現の稱である」と彼は云つた(註二十一)。又「佛國舊來の理想は今失はれた。國民は、多くを約束して何ものをも與へぬ欺瞞の科學に眩惑されて居る。理想は相互の惡しみを和解し、階級を調和し、食しきものを困苦より慰安し、富める者をしてパンと共に愛を頌たしむ」と云ふ(註二十二)。而して彼は民主主義の可能なる爲には全般福利を維持するに、一のエリテを必要とする。則ち國民の中に於ける *majorite dynamique* これであるとして居る(註二十三)。

シヨン會に、現前の國家社會殊に社會的道義に對し、權威を認めずして分離せんとする思想の存する事。又その權威を宗教に求めむとする事。又自然的なる秩序訓練の樹立を社會に必要なりとする事。又佛國舊來の民主主義的理想に導かれて、道義的自覺を明かにすべしとする事。青年は何事をか爲しうるとする確信を以て、祖國の將來を擔ひうるとする事。又故に彼等は何物をか創造せんとする努力に由りて、而して將來觀念に導かれ青年相互の教養に由りて達成を期しつゝある事を知るのは、之をさきの S A J 等の場合に參照すべき處である。私は今環境と思想傳統との二方面に就て、シヨン會起原の一般を觀る事とする(未完)。

【註】

- (1) Ranke: Historisch-politische Zeitschrift, Einleitung, 1832.
- (2) Dritte Reichskonferenz der Jungsozialisten am 12. u. 13. April 1925 in Jena.
- (3) Max Hodann: Die Urhurschenschaft als Jugendbewegung, 1917.
- (4) Comptes-rendu du Congrès de l'Association C. J. F., Besançon, 1899.  
Zamanski: l'Action sociale dans l'Assoc. C. J. F. n. d.
- (5) Das Weimar der arbeitenden Jugend, 1923.
- (6) N. Ariès: Le Sillon et le mouvement démocratique, 1910.  
P. Dabry: Les Catholiques républicains, 1890—1908, 1905.
- (7) Dritte Reichskonferenz etc.
- (8) N. Ariès: *ibid.*  
Der Sillon, "Hochland", 1911, IV-VIII.
- (9) W. Seiflin: Schicksal und Sinn der deutschen Jugend, 1926.  
Max Hodann: *ibid.*
- (10) Calippe: Patitude sociale des Catholiques fr. au XIX. siècle, tome 3, 1912.  
Marc Sangnier: Le Sillon, esprit et méthodes; Discours, tome 1; Le devoir present; etc.
- (11) Max Hodann: *ibid.*
- (12) E. Busse-Wilson: Stufen der Jugendbewegung, 1925.  
V. Engelhardt: Die deut. Jugendbewegung als kulturhistor. Phänomen, 1925.
- (13) F. Lepinsky: Die jungsozialistische Bewegung, ihre Gesch. u. ihre Aufgaben, 1927.

- Georg E. Graf : Freie Jugend. 1919.
- G. Wyneken : Der Kampf fuer die Jugend. 1920. Kap. 2.
- K. Korn : Die Arbeiterjugendbewegung. 1922. TI. I.
- (14) Das Weimar etc.
- (15) Max Westphal : Handbuch für sozialistische Jugendarbeit.
- (16) Dritte Reichskonferenz etc.
- Joh. Schult : Das Jugendproblem in der Gegenwart. 1924.
- (17) Emm. Barbier : Les Erreurs du Sillon. 1905.
- "                  : Les Idées du Sillon. 1906.
- "                  : La Décadence du Sillon. 1907.
- (18) N. Ariès : *ibid.*
- (19) Compte-rendu, Besançon, 1839.
- Goyau et Bréhès : Du Toast à l'Encyclopie. 1892.
- Al. Turmann : Le Développement du catholicisme social depuis l'Encyclopie Rerum Novarum. 1909.
- (20) Aug. J. Alphonse Gratre : Les Sources de la régénération sociale. 1876.
- (21) Le Sillon, esprit et méthodes.
- \* L. Cousin : Le Sillon et les catholiques.
- (22) "Demain." 1906, III.
- (23) Le Sillon, esprit et méthodes.